

新たな広聴の仕組み実践プロジェクト第2回検討会

平成19年9月5日 19:00 から 21:00

参加者：浦田(特定非営利活動法人いせコンビニネット)、米山(松阪市市民活動センター)、
中盛(W.T.Aまちづくりセンター)、岩脇(津市市民活動センター)、辻(広聴広報室)、
川村、大山(サポート委員)、松野、明石(NPO室)

レクチャー(県の広聴のしくみ)

- ・ 県の8つの広聴の仕組みと、過去に実施したが現在は廃止した広聴の仕組みについて共有する。
- ・ 「本音でトーク」は、県民と県との相互理解ということを目的のひとつとしているが、(1)できるだけ多くの参加者に発言してもらいたいので発言時間に制約を設けざるを得ないこと、(2)県の事業には技術的・専門的なものもあり、理解を得るには詳細な説明を要するものもあること、(3)地域の課題の中で、住民と行政との役割分担が明確でないものもあり、役割や関与すべき範囲に対する認識共有が難しいものもあることなど、相互理解に一定の制約や限界がある。
- ・ 「本音でトーク」の運営は、県の都合のよいルールになっていないかと指摘を受けた。
ワークショップ(実験事業の成果を考えよう)
- ・ 民間の視点で実施する場合に得られる成果について仮説を立てる(主な意見)
 1. 運営ルールを維持するために、コーディネーターなどの第三者を入れる
第三者の立場で参加者間の多様な意見を誘発し、論点を図解して見せていく。
県の施策を解説、意識して相互理解を深める。
県の広聴のしくみ、「本音でトーク」の位置づけを参加者に理解してもらう。
運営ルールは参加者が作る。
 2. 前向きな議論となるよう、参加者全員で問題共有できる意見を取り上げ、一つの論点で話し合う
 - 取り上げる意見を参加者の投票やアンケートで決める
 - 大勢の前で発言したくない参加者には意見を紙に書いてもらう
 - 参加者が言いたいことを言えたと思えるようにする
 - 不規則発言を減らして前向きな意見を引き出す
 - 知事の本音と県民の本音をコーディネートする
 - 双方の思いを伝える場として割り切り、分かり合うという視点を捨てる
 3. 地域ごとにテーマを設定すれば議論が深まる
今回は自由テーマで設定されているので、事前にテーマを絞るのは難しい
 4. 知事の課題を知事から話すなど、双方向で進める
参加者から、知事の課題の解決のためのアイデアを出す

意見に対する知事の回答について参加者がコメントする
県の一方的な回答という印象が残らないようにする
知事の人となりアピールし、感情移入しあえる環境をつくる

- 5 . その場の回答が難しい意見は後日フォローする
その他の広聴のしくみを活用する
知事のビデオメッセージで回答する
相反する意見については、協議する機会を設ける
- 6 . 県庁講堂の硬さを感じさせない演出で、民間らしい柔らかい全員参加型の雰囲気を作る
行政が作った場に参加するのではなく県民が作った場に知事を招いた感覚にする
子ども（小中学生）の参加を呼びかける

次回

- ・ 次回までに、目的と期待される成果、何を検証するのかをまとめる。
- ・ 「本音でトーク」をどういう考えのもとにデザインするのか、広聴のしくみとして何を実験するのかを共有する。
- ・ 次回日程 9月18日19時から、次々回日程 10月31日19時から